

鹿児島大学の理系学生の英語学習傾向の研究（1）

坂本育生*

（2015年10月27日 受理）

A Study of Tendencies for Learning English for Undergraduate Students of Science
in Kagoshima University (1)

SAKAMOTO Ikuo

要約

本研究は鹿児島大学理系学部学生の英語に対する学習傾向について予備調査である。調査はアンケートで行い、その内容は読解に関して（2問）、文法に関して（2問）、TOEICに関して（3問）、TOEFLに関して（3問）とした。調査した学部は歯学部、農学部、工学部で、調査の結果から学部ごとに英語に対する学習傾向に違いがあることが分かった。一般的に歯学部の学生は英語力を有しているため応用的学習を望む傾向があり、農学部、工学部は基礎力を定着させたい傾向があることが判明した。全体的に今回の調査では、国際語としての英語学習の意義をよく理解し好意的な意見が多く、さらに鹿児島大学の学生が英語学習に大きな関心を持っていることが判明した。本研究は今後も引き続き継続して調査研究を行い、21世紀の大学英語教育への指針となることを強く期待している。

日本全国の大学の教養部改組から20年余りが経過し、新たなる大学英語教育の改善が求められ、大学入試においてもほとんどすべての学部において筆記試験による入試が実施されている現在、大学学部生の英語学習傾向を正確に把握することは極めて重要であると考えている。

キーワード：国際化、理系学生、読解力、英語文法、英語資格

* 鹿児島大学教育学系 教授

1. はじめに

国際化が叫ばれて久しい今日、日産やユニクロで英語を使用することを推奨する企業などが現れる中、外国語の習得はボーダーレス化する国際社会に向けてのパスポートとなりつつある。特に英語は周知のとおり、必要不可欠なコミュニケーションツールとして役割は年々増すばかりである。理系の学生、研究者、研究系の企業で働く職員などは国際的な学会や企業での製品紹介などで自らの研究、自社の製品を英語で紹介しなければならず、英語力が不十分であれば意思伝達に失敗することが多いことも事実である。

大学生は卒業論文を作成するために多くの論文から情報を捜さなければならないが、大学の紀要や日本国内の論文を除けば、大半は英語で書かれたものを読まなくてはならない。さらにそのような論文は英語のネイティブによって書かれたものであり、日本人と違った論理体系で書かれているためしっかりとした読解力がないと辞書を片手にひたすら単語を調べる作業となるであろう。

文法力に関しても日本人は不安を抱えていることが多い。過去に筆者が行ったアンケート調査でも文法に不安を抱え、大学でしっかり学び直したいという意見は多く、今回の理系学部へのアンケート調査でもその傾向が表れている。これは中学校、高等学校を通して文法学習がうまくいかなかった状況があり、ベネッセ教育総合研究所(2014)や近畿大学工学部による聞き取り調査(2003)などでも英語学習がうまくいかなかったのは中学、高校時代という意見が多く、授業時間数、教員の確保など、現場での教育が難しいことを物語っている。日本人の英語教育は一般的に中学生から本格的に始まっているが、実際は英語に触れる機会は小学生のとき、場合によっては幼稚園、保育園からであることも珍しくない。現在は小学生のころは音声に触れるだけで書く、読むは実施されないことが多い。中学生になると英語学習は受験色に染まるため、主に読むことに焦点が置かれ聞く、話す訓練を受けられるのはALTが来た時ぐらいであろう。NHKアーカイブスの番組「会社に英語がやってきた」では戦後英語ブームが起こった後高度経済成長が始まり音声を中心とする教育から、筆記中心のものへと変わったと紹介されている。本来言語というものはバランスよく学ぶことがよい刺激となるのは言うまでもないが、現在のところその融合がうまくいっていない点も多い。

英語資格習得の重要性に関してはもはやいうことはないであろう。日本ではかつて英語検定を中心とした受験スタイルが一般的であったが、1979年より始まったTOEICテストは最初こそは3000人程度であったがその数を徐々に増やし、今では年間約230万人もの受験者を抱えるようになった。実社会でもTOEICの重要性を認識しており、履歴書の資格欄にTOEICのスコアを書くことで職種にもよるが好印象を得られるようになった。また、TOEFLも留学するための英語力を審査するために必要な試験となっている。鹿児島大学でもTOEFLを入学試験に取り入れようとする動きがあり、その重要性は増していると言える。

現在英語資格は様々な種類の、用途に応じたものとなっている。TOEIC、英検、G-TELP、やや学術的だがTOEFLなどは一般的な英語と見なすこともでき、日商ビジネス英検、

工業英語などはその専門分野に特化した、より実用的なものと言える。

本研究は理系学生に対するアンケート調査を行い、学習傾向を探るものである。アンケートを作成するには事前に用意した質問項目から必要と思われるものを選んだ。その内訳は、英語力（長文読解を基に）、英文法、英語資格試験（TOEIC、TOEFL）となっている。今回の研究はいわゆる予備実験的な位置づけであり、学生の英語に対する傾向を探るためのものであり、今後も継続して続けていくものである。アンケート調査の効用を測るために必要な統計処理（注1）はその後の研究調査を重ねることにより順次実施していくことにする。

2. アンケートに関して

今回のアンケート調査は2015年前期に行った予備調査の結果をもとに内容を見直し実施した（注2）。質問の簡単な内容は以下の通りになる

1. 読解に関して（2問）
2. 文法に関して（2問）
3. TOEICに関して（3問）
4. TOEFLに関して（3問）

本文では一つ一つの質問内容を3学部同士比較しながら検証している。

3. アンケート被験者について

アンケート調査は著者のクラスで受け持ったクラスで行った。一つは毎年夏休みに実施しているTOEICの教材を基にした実用英語講座で、TOEICに関心のある理系の学生が主体となっている。もう一つは同じく筆者の担当する農学部クラスである。今回調査を実施した学部は歯学部、工学部、農学部である。

4. 読解質問に関して

鹿児島大学は複数の理系学部と文系学部からなる総合大学である。そのため様々な動機、学習意欲を持った学生が多数入学してくる。学力にもばらつきがあり、医学部、歯学部、農学部獣医学科などは英語力が高い学生が入学してくる。一般的な学生の英語力は英検でいえば準2級から2級ほど、TOEICでもG-TELPのTOEIC換算スコアでも300点から400点ほどである。もちろんそれ以上の英語力を有する学生も多いが、実情は英語力に不安を抱える学生が多い。

読解力の判断基準として鹿児島大学を受験した学生が受ける必要のあるセンター試験の長文問題を読解基準として質問の要項とした。今回歯学部、工学部、農学部の3学科でアンケートを実施し、結果をまとめ考察した。以下は読解に関する質問項目である。

A. 読解について

1. 長文（センターレベル）の英文の内容をどれだけ理解していると思いますか。

1. ほとんど理解できる 2. 少し理解できる 3. あまり理解できない 4. わからない
()

2. 長文読解に関して

1. 読めるようになりたい 2. できれば読めるようになりたい 3. 余裕があれば読めるようになるために学習したい 4. 特にそう考えていない
()

	A-1					A-2				
	1	2	3	4	Total	1	2	3	4	Total
歯学部	16	6	0	0	22	18	3	1	0	22
%	73	27	0	0	100	82	14	4	0	100
農学部	1	23	17	10	51	30	16	5	0	51
%	2	45	33	10	100	59	31	10	0	100
工学部	6	8	2	0	16	12	4	0	0	16
%	39	50	1	0	100	75	25	0	0	100

表1. アンケート読解質問A-1, 2の結果

長文読解力に関しては学部別に違う結果が出ている。歯学部は入学する際には全国的にも高い学力が要求され、英語力が高い学生が多い傾向にある。そのためセンターレベルの長文であれば苦勞せずに読むことができるという回答が得られた。農学部、工学部ではほとんど読めるという回答は比較的少なく、全体的に理解できていないという回答が得られた。

長文読解力を向上させたいという学生は3学科通じて多く、英語力向上につながる読解能力に関心が高いことがうかがえる。学生は基本的に中学校から読解によって英語を学習しているのでその重要性は認識しているものと思われる。

1. 文法に関して

英文法を身につけさせることは困難であることは英語教育にたずさわる教師には周知のとおりであろう。英文法の学習は主として中学から始まっているが、大学に至るまでにしっかりと身につけていく学生は非常に少ない。ベネッセ教育総合研究所の報告(2014)でも中高生が文法に苦手意識を持っていることがわかる。以下にアンケート内容を示す。

B. 文法に関して

3. 文法の勉強もう一度やり直したいですか

1. 詳しくやり直したい 2. できればやり直したい 3. 余裕があればやり直したい
4. 特に必要ない

()

4. 文法分野に関して

学習したい分野に丸をつけてください（複数回答可）

1	5文型		5	動名詞・不定詞		9	接続詞		13	比較	
2	品詞		6	分詞		10	熟語		14	全分野	
3	後置修飾		7	仮定法		11	時制				
4	関係詞		8	助動詞		12	完了形				

B-3で英文法に対する意識を聞き、B-4では学びたい分野について複数回答可で答えてもらった。結果は以下の通りとなった。

	B-3				
	1	2	3	4	Total
歯学部	1	9	8	4	22
%	4	41	36	18	100
農学部	19	28	4	0	51
%	37	55	8	0	100
工学部	5	6	5	0	16
%	31	38	31	0	100

表2. アンケート文法質問B-3の結果

歯学部と農学部、工学部ではっきりとした意識の違いが見られた。前述のとおり歯学部の学生は高い基準での受験勉強を経験しており、英語力に問題のない場合が多いので文法に苦手意識を持っている割合は低い。反対に農学部、工学部の学生はやり直したい、できればやり直したいと回答した学生は多く、必要ないと答えた学生はいなかった。

以下にB-4の結果を示す。

	B-4													
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
歯学部	2	3	1	5	2	2	4	0	1	7	7	3	1	6
農学部	7	9	14	10	11	12	21	14	12	19	10	13	9	23
工学部	1	3	2	6	0	1	1	1	1	6	8	2	0	4

表3. アンケート文法関係質問B-4の結果

B-4では関心の高い項目と低い項目が分かれた。農学部は他の学科の調査と比べ学生が多かったのだからつきが見られにくかったものの、歯学部と工学部では復習したい項目がはっきりしていた。項目10の完了形と項目11の時制は現場に立って教えていたものにとっては思い当たる節があった。英語の過去、現在、未来の感覚ならびに進行相、完了相は教えることの困難な分野で、学生たちにとっても理解の難しいものである。文法の復習を行う場合、基本的に全体を包括的に学ぶ傾向があるが、多くの学生が共通して苦手としているところを探し出し、集中して教えることも必要であるのかもしれない。

6. TOEIC に関して

3学科の学生に対し、TOEIC に対する意識調査を行った。現在鹿児島大学は TOEIC により単位が認定され、鹿児島大学生協は TOEIC 公開試験の1000円割引を行っており、申し込む学生は多い。以下に質問内容を示す。

C. TOEIC に関して

5. TOEIC を受けたことはありますか。

1. 何回も受けたことがある 2. 一回受けたことがある 3. 受けたことがない
4. TOEIC を知らない

()

6. TOEIC を受けようと考えていますか。

1. 受けようと考えている 2. できれば受けたいと考えている 3. 就職、進学に必要であれば受けたい 4. 受ける予定は今のところない

()

7. 現在本研究室では TOEIC 対策としていくつかの講義を行おうと思っています。以下の4つからもっとも受けたいものを一つ選んでください。

1. Part 5 (文法問題) を基とした文法復習講義
2. Part 1～ part 4 (リスニング問題) を基とした聞き取り強化講義
3. Part 6～ part 7 (長文問題) を基とした読解講義
4. すべてを網羅した総合的講義

()

C-5では TOEIC の受験経験、C-6では TOEIC 受験に関する意識、C-7では筆者を中心としたチームによる TOEIC 講座開設のための調査を行った。以下の表がその結果をまとめたものである。

	C-5					C-6				
	1	2	3	4	Total	1	2	3	4	Total
歯学部	1	2	19	0	22	3	5	6	7	21
%	4	9	87	0	100	14	24	29	33	100
農学部	4	5	41	1	51	6	18	19	8	51
%	8	10	80	2	100	12	35	37	16	100
工学部	1	2	13	0	16	8	4	3	1	16
%	6	13	81	0	100	50	25	19	6	100

表4. アンケート TOEIC 関係質問C-5, C-6の結果

C-5, C-6より、TOEIC を受けた学生はそれほど多くはないが、受ける意志のある学生は多いことがわかる。また工学部を除けば受ける機会があれば受けるか、就職、進学に必要であれば受けたいという意見も多かった。

	D-8					D-9				
	1	2	3	4	Total	1	2	3	4	Total
歯学部	1	1	18	2	22	0	2	4	15	21
%	5	5	81	9	100	0	10	19	71	100
農学部	1	2	33	15	51	2	6	25	17	50
%	2	4	65	29	100	4	12	50	34	100
工学部	1	1	11	3	16	2	3	4	7	16
%	6	6	69	19	100	12	19	25	44	100

表6. アンケート TOEFL 関係質問D-8, D-9の結果

TOEFLは主に留学するための英語力を測る指標となり得るものであるが、認知度に関しては英検、TOEICに及ばないようである。学生の関心もTOEICに比べ低いように思える。積極的に受ける学生が少ないのはTOEFLの名前は知っていてもその内容を知らない、機会があれば、もしくは就職、進学に必要であればと無難な回答にしたことが理由ではないかと思われる。

D-10の自由回答項目では、英語力に不安をあげる意見、TOEICの講座の開設希望などが得られた。今まで個人的にいくらかのアンケートを取ってきたが、回答はこのような意見が多い。

8. おわりに

本研究では読解、文法、英語資格にしぼって学生の英語能力、学習、英語資格への意識の調査を行った。今回は予備実験的な位置づけで研究を行っており、今後も継続的に続けていく予定である。データに関してはある程度の傾向はつかめたものの、数の問題もあり、確かな結果とは言い難い。しかし、学科別に英語に対する意識の違いが垣間見られた。歯学部では英語に対しては苦手という認識はあまり見られず、より応用的な英語学習がしたいという目が見られた。農学部に関しては様々な英語力、英語に対する意識の学生がいるが、どちらかというに応用的な学習がしたいという意見が多かった。工学部では基礎的な学習をしたいという傾向があり、TOEICに関しても受講したいという学生が多いという結果となった。工学部に関しては筆者を含めたチームがより詳しくESP(English for Specific Purposes)の観点をもとに研究する予定であり、基礎から応用へと続く教育法を模索している。

全体的に英語学習を続けたいという学生が大半を占めていた。特に、英語資格の習得を目指した学習をしたいという意見が多かった。英語学習は一朝一夕では成り立たないのは学習者が皆感じていることであり、資格が重要なのはいうまでもない。その根底を支えているのはやはり英語の基礎となる文法と語彙力、基本的な読解力などである。その点を重視して今後はさらなる調査を行うことが必要であろう。

参考文献

- 相澤裕介. 統計処理に使う EXCEL2013活用法：データ分析に使える EXCEL 実践テクニック, カットシステム, 2013
- 坂本育生. ESP 教育の研究と開発—海事英語を出発点として（Ⅱ）— 鹿児島大学言語文化論集（VERBA）, 2013
- 坂本育生. ESP 教育の研究と開発—海事英語を出発点として 鹿児島大学教育学部実践研究紀要, No.22, pp.83-90, 2012
- 坂本育生. 水産学部専門英語に関する基礎研究 鹿児島大学言語文化論集（VERBA）, No.35, pp.37-48, 2011
- 根岸雅史, 酒井英樹他. 中高生の英語学習に関する実態調査2014, ベネッセ教育総合研究所, 2014
- 本間義文. 近畿大学工学部学生の英語能力の現状—TOEIC スコアおよび語法理解の分析による適正目標設定の試み— 近畿大学工学部紀要, 2003

（注）

1. 統計処理に関するテキストは多数あり、学問的なもの、EXCEL を用いた統計処理方法に特化したものなどがあるが、今回の研究では「統計処理に使う EXCEL2013活用法：データ分析に使える EXCEL 実践テクニック」を参考にした。いくつかの質問項目の回答に対し分散分析を行ってみたものの今回の実験は予備的なものであり、またデータ数の問題もあったので詳しい分析手法は次回以降の課題としてとらえている。
2. 本研究は、共通教育講義でのアンケート実施に鹿児島大学教育センター高橋玄一郎教授、アンケート作成、統計分析などの作業に鹿児島大学教育学部英語専修修了生仮屋真悟氏との共同作業により完成した。この場を借りて感謝の意を述べる。

